中国における上古の部と中古の重紐

頼　惟勤

一　まえおき

顧炎武(一六一三―一六八二)は広韻の支韻（平声の韻目を挙げて、相い応ずる上・去声をも兼ねしめる。以下同じ）について、もとから支韻のものと、「後人が誤って支韻に入れたもの」（顧氏のいい方に従う。もともと誤って入れたわけではない）とを分け、その著「古音表」(「音学五書」所収)において、前書を第二部とし、後者を第六部とした。江永(一六八一―一七六二)はこれを承け、「四声切韻表」(「江氏韻書三種」所収)において、もともと支韻のもの（顧氏第二部）と、歌戈韻に通ずる支韻（顧氏第六部）とを別々に表示した。

次いで段玉裁(一七三五―一八一五)は「六書音均表」(説文段注に附刻)において、第十二部と第十三部との区別を立てた。これはいわば広韻の真韻について、本来のもの（段氏第十二部）と、痕魂韻に通ずる真韻（段氏第十三部）とを分けたことになる。

更に王念孫(一七四四―一八三二)は、「経義述聞」(巻三一・韻廿一部・古)によって知られるように、第十二部（至部）と第十三部（脂部）の区別を立てた。これはいわば、広韻の質韻について、その本来のもの（王氏第十二部）と、没韻に通ずるもの（王氏第十三部）とを分けたことになる。

降って、章炳麟(一八六八―一九三六)「文始」、王力「南北朝詩人用韻考」(清華学報一一―三)・「上古韻母系統研究」(清華学報一二―三)、董同龢「上古音韻表稿」(集刊一八再収)などの諸研究によって脂部と微部とが区別されるに至った。[1] これはいわば、広韻の脂韻について、その本

来のもの（王董氏脂部）と、哈灰韻に通ずる脂韻（王董氏微部）とを分けたことになる。

（なお、以上のいわゆる「某韻に通ずる某韻」といういい方は清朝以前のいい方に倣ったものであって、現代風には別のいい廻しをしなければならないが、それは丁度、太陽の出没をわざわざ地球の自転といい直すようなもので、現象的には同じことを指していうのであるから、しばらくわかり易く古称に従っておく。）(2)

さて上述の二分された諸韻、即ち支・真・質・脂の諸韻はいずれも重紐を持つ。(3) そして、重紐四等は原則として上述のいわゆる「本来のもの」であり、重紐三等は原則として上述のいわゆる「他の韻に通ずるもの」である。ここまでは既に、陳澧（一八一〇―一八八二）「切韻考」、章炳麟「国故論衡」によって指摘され、包括的には董同龢「広韻重紐試釈」（集刊三）・「上古音韻表稿」（集刊二）、藤堂明保「中古漢語の音韻論的対立」（日本中国学会報一）によって論ぜられた。ただしそれらはいずれも概論的である。そして具体的にみると、重紐の三・四等そのものには時として異同があり、また反切下字から機械的に決めることができない。(4) また同じ文字が重紐の三・四等に重出することもある。(5) また董氏が脂微分部の証拠として示した脂韻の小韻表（集刊一八、七〇―七一頁）も、必ずしも四等が脂部、三等が微部とはならない。また日本側の資料たる特殊仮名遣いは、キギヒビミケゲヘベメの甲は四等的、乙は三等的であるが、例外も多い。以上のような次第で、広韻の重紐について、三・四等の各々が上古のどの部から来ているか調査することは、必ずしも意義のないことではないであろう。以下はその一つのささやかな試みに過ぎない。

二　手順について

以下は次のような手順による。即ち、㈠広韻の重紐のある諸韻について、㈡唇牙喉音（但し四等の喩母を除く）に属する小韻の文字全部を取り出し、㈢これを三等のグループと四等のグループとにわけ、㈣各グループ毎に、その文字の上古の部を調べ、㈤そこから、どのようなことが知られるかを見る。

以上を少し説明すると、㈠の広韻については、本来ならば切韻そのものに近づくべき手続き、例えば「全本王仁煦刊謬補缺切韻」（戦時中、清の故宮から発見された完整本）との対照などが望ましいが、いまは全く広韻のみに拠った。また重紐のある諸韻でも、上古の部の違いにならない仙・薛・祭・宵・侵・緝・塩・葉の諸韻はここでは取り上げない。(6) 次に㈡の小韻については、対応する同じ紐のないものであっても、唇牙喉音（喩母を除く）である限りはこれを取り上げた。この点において違うのは有坂秀世「カールグレン氏の拗音説を評す」（「国語音韻史の研究」所収、三二三頁以下）において列挙された一三九小韻であって、これは相い対応して重なる紐が明に存在するものを、広韻全体から取り出したものである。しかしそれとこれとは論じようとする目的が違う。従って取り上げる対象も自ら違わざるを得ないのである。なお喩母四等を除くのは、それが上古の舌音と関係が深く、唇牙喉音とは関係が浅いからである。次に㈢の等位については、董氏「広韻重紐試釈」所載の表（集刊一三、五頁以下）にできる限り従った。これは「通志」の「七音略」に拠り、その他の各種の韻図によって校訂したものである。因に、中国においては韻鏡は佚書であったから、音韻（特に韻図）といえば韻鏡を連想する日本と色合いの違う点がある。最後に㈣の上古の部について、諸声符の取り扱いはまず沈兼士「広韻声系」（一九四五刊、北京）に拠り、更に江沅（一八三八）「説文解字音均表」（「皇清経解」所収）によって異同を検した。いうまでもないことながら、江沅は段玉裁の説を承けているから、これによって段説を参照したことになる。また諸声符の分類については原則として江有誥（一七七三頃―一八五一）の「諸声表」（「江氏音学十書」所収）に拠り、特に脂部・微部の分類は董氏「中国語音史」所載の諸声表（下一三一頁以）に拠った。江氏の表は（そしてこれに全体的に拠った董氏の表も）諸声符の整理が行き届いているのが特徴である。

三　対照表

以上の手順に従って文字の重紐・上古対照表を作り、それを簡示した簡表を作る。対照表は、「支韻四等」から「脂韻三等」に至る六表より成り、頭子音を四一字母名で示し、平上去入を横に取り、見出しに小韻の先頭字を掲げた。小韻の

文字を一々掲げるのは繁雑に過ぎるので、その諧声符を掲げ、その小計を算用数字で示した。数字の下の文字は上古の部名を示す。また諧声符は二重・三重（またそれ以上）に発達しているものが多いが、その最初の形に溯って表示することは不便であるので、なるべくその小韻の文字に近いものを掲げた。（一例を挙げると、「石へんに薄」の字があるとすると、これは「薄」声（諧声符が「薄」だということ）である。そして「薄」の字は「溥」声であり、「溥」の字に「尃」声であり、「尃」の字は「甫」声であり、「甫」の字は「父」声である。この場合、表では「石へんに薄」の字に対しては諧声符として父を掲げずに薄を掲げるのである。なお江有誥の諧声表は、このようなとき「父」だけを掲げる。上述の「行き届いた整理」とはこのことである。）

中古＼上古		e系				ə系					a系					小計			
		佳	耕	脂	真	歌	之	幽	微	文	祭	元	魚	不明	計	e	ə	他
4等	支	133	0	31	0	6	0	0	2	0	1	0	0	2	175	164	8	3
	真	1	3	5	79	0	0	0	1	7	0	11	0	0	107	88	8	11
	脂	9	3	160	0	1	0	2	17	0	6	0	0	4	202	172	20	10
3等	支	29	0	2	0	199	0	0	57	0	0	4	0	4	235	31	256	8
	真	0	1	1	21	0	4	0	3	101	0	6	0	0	137	23	108	6
	脂	0	0	109	1	1	53	22	95	2	3	1	1	5	293	110	173	10

表においては，平声の韻目で上去入声を兼ねしめる。但し入声の所属は中古とは違う。「支」は「支・紙・寘・昔」;「真」は「真諄・軫準・震稕」;「脂」は「脂・旨・至・質術」を意味する。また上古歌部は特にəの部に入れて数える。

四　表から知られる事項

表から知られる事項はあまり豊かなものとはいえない。概ね常識的なことしか出てこないのは遺憾であるが、以下、気づいた点を二三述べる。

㈠　中古四等（但し唇牙喉のみ、以下の等位はすべて同様）は上古主母音eの部（佳・耕・脂・真）から来ている。これに対し中古三等は、原則としては上古主母音əの部（之・幽[7]・微・文）から来るが、上古主母音eの部の文字も混在する。同じことを上古を基準にしていうと、上古主母音eの部の文字は主として中古四等に変化するが、三等にも若干は変化する。これに対し上古主母音əの部の文字は、中古三等に変化する。上古主母音aの部（歌・祭・元・魚）は中古三・四等に跨りうるが、歌部だけは、以上の点に関して全くə部なみに変

化する。

以上の現象は、一応は四等の三等化しやすさを示すものといえそうである。ただ、その詳しい条件を考え、例外を説明し尽すことは、現状では困難というほかはない。

(二) 上古eと中古四等との間、および上古əと中古三等との間には、上述のように密接な関係があるが、そこにはまた混乱も存在する。そして、その混乱が少ければ少いほど早く、上古の部わけがなされ、且つ容易に公認された。即ち、中古支韻はこの混乱が最も少い。そしてそれに応じて上古の支・歌の部わけは、早くも顧炎武によってなされ、且つ以後の誰人も、これを疑うことがなかった。次に中古真韻になると、この混乱はやや多いが、それに応じて上古の真・文の部わけは、降って段玉裁によって始めてなされた。しかもその後も、彼の師・戴震(一七二三―一七七七「声類表」を著わす)はこれに従わず、孔広森(一七五二―一七八六「詩声類」を著わす)も従わず、江有誥は段氏と議論した後、ようやくにして従ったというような次第であった(江氏は「寄段茂堂先生原書」では真文の部わけを認めなかった。のちこれを認めるに至ったので、「音学十書」を刻するとき、江氏は自らその部分を削除した)

更に中古質韻にはこの混乱が一層増加するが、それに応じて、上古の屑・没(仮に黄侃(一八八六―一九三五)の用語による)の部わけは、王念孫になって、ようやくはっきりと主張されるに至った。尤も、王念孫の考えは、既に段氏にも芽ばえていたわけであるが(段氏第十二部入声が王氏の至部、即ち黄氏の屑部に当る。)段氏のこの部分に関する説は戴震が最も強く反対した所であり、孔広森・江有誥もまた従わなかった所であった。最後に中古脂韻に至っては混乱は最も甚しく、これに応じて上古の脂・微の部わけは最近になって提言されるようになったものである。そしてその当否は、まだ十分に究明し尽くされてはいない。さしあたって、大矢氏の分類との異同はよく検討する必要があると思われる。

(三) 日本特殊仮名遣いの例は、甲・乙(オ段を除く。以下同じ)に関して(1)上古主母音e・中古四等・日本甲系、および(2)上古主母音ə・中古三等・日本乙系、となる傾向が認められる。いま三・四等以外の文字を除き、専ら三・四等の文字

だけについてみると、以上の(1)(2)の傾向に外れるものは次の諸例である。(8)

(イ) 「祁・耆・嵴・湄・美・伎・妓・平」はいずれも日本・甲系で中古三等である。しかしこれらは上古主母音eの部の文字であり、日本の例が、その古い形を示しているとすることができる。

(ロ) 「秘・眉・媚」はいずれも日本・乙系で中古三等である。これはこの限りでは何の問題もないかの如くであるが、これらは上古主母音eの部から来た文字である。それが日本・中国中古とも同様の不規則変化を遂げたもので、日本例の由来が中国に求められる場合である。

(ハ) 「鼻・寐」は日本・甲系で中古四等であるが、これは上古主母音əの部から来た。(ロ)と同じような意味で、日本・中国とも同じ不規則変化を遂げたもので、日本例の由来が中国に求められる場合である。

(ニ) 「閉・閇・米」は日本・乙系で中古四等であり、且つ上古主母音eの部から来た。これは中国側には何の不規則的な点もなく、上古eから中古四等へと変化した。ただ日本例は、それが乙系となっている点、甚だ不規則である。しかし、上古eは、時として三等化してもいるので、日本例はそのような特徴を承けたものと考えられないことはない。

(ホ) 「階」は日本・乙系。但し中古二等であるから本考察の範囲外であるが、上古はeの部であり、前項(ニ)にやや似た点がある。

(ヘ) 「迷」は日本で甲・乙両属であるが、(ニ)の「米」と同じく、上古e、中古四等である。従ってそのままならば日本の甲が期待され、「米」と変化を共にしたならば乙となるべきで、その意味でも、甲乙両属たるに適しい文字といえよう。

(ト) 「規」は日本・乙系で中古四等、そして上古主母音eの部。この点では(ニ)と似ているが、この場合は合口音であるので、やや条件を異にする。

(チ) 上古主母音aの部(歌部を除く)から来た文字は、中古重紐に関しては中間的であるので、この考察にとって殆ど役

立つところがない。念のためやや例外的（甲・三等の関係）なものを挙げると「別・反・返・險」がこれであり、これらは上古a・中古三等・日本甲系である。

(ﾘ) 最後に残るのは「儀・蟻」である。即ちこれは、上古歌部（əに相当）・中古三等・日本甲系であり、しかも前掲(ﾊ)の如くにはその由来を中古の韻図などに求めることのできないものである。その点では前掲(ﾆ)に似ているが、(ﾆ)はeと乙との関係であり、これはəと甲との関係であるから、これは例外としての程度がより強いということができる。（前述の如く、eと三等との関係は例外の中では比較的よく現われ、əと四等との関係は現われ方が少ない。）思うに(ﾘ)の例は、上古と重紐との関係からは説明できないもので、むしろ重紐の消滅過程において説明を試みるべき事項なのであろう。(9)

以上、すべてについて音声・音韻の実質について触れなかったのは甚だ不十分な点であるが、その前段階の考察として何らかの参考になる点があれば幸である。（一九五七・一・三〇）

注

（1） この他、この分野での考察には大矢透「周代古音考」における爾部・類部の説、陸志韋「古音説略」における説（陸氏は分部をあまり重んじないで、統計的に処理する）、B. Karlgren の第六部と第十一部（Grammata Serica, BMFEA. 12.）または第三十五部と第七部（Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese, BMFEA. 26.）の説などがある。

（2） 上古の部わけ、諸声符との関係、特殊仮名遣いの文字の上古・中古対照表などについては、解説論文「上古中国語の舌音韻尾諸部の分部問題」（茶水大紀要九）参照。

（3） 広韻の支・脂・祭・真・諄・仙・宵・侵・塩・質・術・薛・緝・葉およびその上・去声の唇牙喉音に、同じ紐の小韻が重出するのを重紐と呼ぶ。韻図はこれを三等と四等とわけて収める。また「清と庚三等」（およびその上・去声）、および「昔と陌三等」は、韻を越えて、重紐を持つといえる。また、これ以外にも、例えば至韻（澄母）・之韻（牀母二等）・尤韻（渓母）・昔韻（非母）などに、重紐に準ずるような例もある。しかしいまここでは、始めに掲げた「支」乃至「葉」の唇牙喉音の重紐だけを考える（喩母四等と、その三等〔即ち于母〕とは、重紐とは考えない。なぜなら、これは明に異る紐であるからである）。重紐の解釈をめぐっては多くの論文が発表された。大野晋・頼「万葉仮名の字音研究の手引き」（万葉集大成一二）三五二頁以下参照。

(4) 河野六郎「朝鮮漢字音の一特質」(言語研究三) 参照。

(5) 黄侃の集めた材料によって作った表が周法高「広韻重紐的研究」(集刊一三) 五五頁以下に見える。

(6) 董氏は中古の祭・薛・仙の重紐を利用して、上古の祭・元部を更に細分し、中古の塩・葉の重紐を利用して、上古の葉・談部を更に細分した。また別に、黄侃はこれよりさき「談添盍帖分四部説」(制言八) の説を考えていたが、これはほぼ、董氏の葉・談部の細分に相当する。また董氏によると中古の宵韻の重紐からも、上古の宵部の細分がやや可能である (以上「上古韻表稿」に見える)。しかしこれらは、はっきりした部として独立させるにはまだ不十分なので、ここでは取り上げないこととした。

(7) 幽部を上古主母音ə の部とするのは私見に過ぎないが、この点は竊に期する所あって固執するものである。曾て「上古中国語の喉音韻尾について」(茶水大紀要三) として論じたことがある。

(8) 個別の文字の分類についてやや詳しくは注 (2) の文献参照。文字と用法との典拠は「世界言語概説下」二六六頁以下の表 (大野晋著) である。

(9) 「蟻」および「儀」は、日本書記において、しかもある限られた範囲のみで用いられていると考えられる。亀井孝 **Takashi Kamei: On the Authenticity of *On*-readings in Sino-Japanese.** (**The Annals of the Hitotsubashi Academy, V-1, 1954. 10, p. 97-105.**) においては、中古で同音 (四声の違いはある) の「宜・義・蟻・儀」の文字について、日本書紀は用字の混乱を避けるためであろうが、従来ギ乙その他に用いられた「宜・義」を仮名とせず、従来用いられたことのない「蟻・儀」を採ってギ甲の仮名としていることが指摘され、且つ、これは、これらの文字が中国において、いわばギ乙的な音からギ甲的な音へ変化したことを反映したものであるべきことが述べられている。(p. 103-104)

一般に重紐の消滅過程について、特別に追及した論考はないと思われるので、以下、何らかの参考になりそうな事項を列挙しておく。

(イ) 中古脂韻が上古との関係において混乱している現象は、重紐の混乱が中古に既に存在していることを示すものと考えられる。これに比べて支韻が比較的整然としているのは、出発点において上古主母音の違いがeとaとの如く、大きく開いていたからであろう。中古における重紐は、支韻以外の場合、上古ではe・əの違いに換算されるわけであるが、この上古e・əの混乱もまた、絶無ではない。例えば段玉裁は第十二部 (真部・en) と第十三部 (文部・ən) との分割に当っては、「民」(第十二部) と「昏」(第十三部) との関係を、かなり無理して絶ち切らなければならなかった。その他若干の例は、既に上掲の表にも見える。「民」声は次濁音 (韻鏡の清濁音) であるが、次濁音は調音が瞬間的に終るものでもないし、また調音の位置・口の形に融通

性があると思われる。恐くそのためであろうが、次濁音にiが続くとき、iの音声は、先行の次濁音に影響されるよりも、むしろ後行の要素に影響されやすいといえるようである。つまり、次濁音に続くiは、音声的に巾を持つことが容易である。〔例〕現代北京語、見〔tɕiæn⁴〕匠〔tɕiaŋ⁴〕念〔niæn⁴〕醸〔neaŋ⁴〕。次濁音のこの性質は、重紐の混乱を助けるといえるかも知れない。

(ロ) 現代広東語では、中古質韻は一般に -ɐt である。ところで、非母においては、三等「筆」〔pɐt⁷〕、四等「必」〔pit⁷〕。影母においては三等「乙」〔jɐt⁸〕、四等「一」〔jɐt⁷〕(ただし -yt はこの韻の合口の形である)。微母(のみならず一般に他の場合)においては三等「密」、四等「蜜」ともに〔mɐt⁸〕の如くみな -ɐt となる。このように、重紐の変化は複雑を極め、何を条件としているのか判定し難いことが多い。これらは一応頭子音による変化とすると、頭子音を条件とするものに、中原音韻の支思韻・斉微韻の分化が挙げられそうである。また朝鮮漢字音については有坂秀世「漢字の朝鮮音について」(「国語音韻史の研究」所収)に記されたものがある。以上は介音(iなど)の方が頭子音によって変化した場合であるが、介音の方が条件となって頭子音が変化したと思われる場合については、河野六郎「中国音韻史研究の一方向——第一口蓋化に関連して——」(中国文化研究会会報一一二)参照。

——お茶の水女子大学講師——